



# 石神井中だより

練馬区立石神井中学校

校長 山田 美鈴

令和8年6月3日

第3号

## 非日常の活動を通して得るもの

校長 山田 美鈴

「私たちにとって石神井中で最後の体育祭。3年生全員の方で、絶対成功させましょう。一生の思い出になる体育祭にして、来る人みんなが驚く体育祭にしたいです。」体育祭2日前の学年朝礼、3学年全員に向かって体育祭実行委員が力説していました。微動だにせず聞いていた3年生たちの光景を見て、私は体育祭の成功をそのときすでに確信しました。

今までも「かっこいい背中」を後輩たちに見せるという本来の意味を感じ、雄姿を見せ続けてきた3年生。その背中を追って2年生、1年生の成長も日ごとに感じる事ができました。

学校では非日常の活動で得られる体験活動の意義が非常に深く、体育祭もその一つです。当然運動が嫌い、苦手という生徒もいます。それでも集団として取り組むことの価値を生徒たち自ら築き上げてきたからこそ、弱音も出さず頑張ってくることができました。スポーツには勝敗がつきものですから、勝って喜び負けて悔しがるのは当然です。しかしこういった経験を通して「勝って驕らず、負けて腐らず」を本校の生徒たちは身に付けています。努力しても勝つという結果につながらないこともあります。でもその過程に後悔することがなければ、必ず今後の生活に生かしていけるはずですよ。

体育祭終了後、すでに「来年度は体育祭実行委員になる」とか「合唱コンクールの実行委員になる」「合唱コンクールは金賞獲ろう」と宣言している生徒もいます。悔しさをバネにして次の目標を具体的に立てている生徒たちの思いは、内発的な動機付けとなっています。

こういった生徒の内発的動機付けは、大人が放任して自然に構築されていくものではありません。「教える」という役割に留まることなく、早い段階から教員側が場を整えコーチングしたり、時には生徒と高め合ったりして共に作ってきた関係性あればこそです。「やらせる」ものでは生徒の自主性は育ちません。

体育祭後には日常の教科授業となり、2週間後には定期考査を予定しています。1年生にとっては初めての定期考査です。体育祭のような非日常の取組で培った力を、通常の学習活動に生かしていけるよう、スイッチの切り替えを巧みに行って頑張ってもらいたいです。

さて本校では国際理解教育の一環として、今年度非日常の活動となる大きなイベントを今後2つ予定しております。

ひとつは6月30日(火)にオーストラリアのイプスウィッチ市レッドバンク校から日本の中学校校体験学習として13名の生徒が来校します。練馬区の中学校の中から代表校として選ばれ、訪問することになりました。バディ生徒は3年生の代表にお願いしていますが、歓迎セレモニーをはじめ歓迎演奏、授業体験、部活動見学など、全校でおもてなしをする予定です。

また10月19日(月)には道徳授業地区公開講座の一環としてベトナムアンサンブルチャリティコンサートを行います。来校するベトナムの「国立ボンセン歌舞団」はベトナム・カオハン省枯葉剤被害者三世学生へ奨学金のチャリティ基金を集めるために日本に来日し、その機会に石神井中にも来ていただけることになりました。

世界では紛争や分断といった状況がある中で、非日常となる国際理解教育の活動を通して、生徒たちの見聞をさらに広げられる機会になればと思っています。